

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

学校の寮を出て二十歳から二十一歳にかけてある教育者のお宅に下宿させていただいた。そのお宅のかずかずの蔵書のなかに、新潮社版の『世界文学全集』が三十数冊そろえてあった。卒業までにその全部を読んではしまおうと私は決心した。

そこでときにはねじりハチ巻をしたりして、帰宅してから読むように心がけた。ヴェクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』など、すじがきはだいたい知っていたが、大部のものをこまかに読んでみると、純文学的にもなかなかおもしろいところがありユーゴーとはえらい作家だな、とつくづく見直したようないでであった。

とにかく世界文学の代表作を片っぱしから、ときにはページをななめに読むこともあった。しかし、苦しいなかにも読破してゆくことがおもしろくて、けつきよく二ヶ月ごろまでにはひととおり目をとおしてしまつたのである。

そのうちに自宅の書架は、だんだんいっぱいになりついにはみ出すばかりとなつたついで、庭先につくつた書庫も、とうとう一杯になつてしまつた。そして約二十年の歳月が流れた。この書架のどこには、どういふ本があるかということは、そこに行かなくても、ちゃんと頭に入つていた。停電



読書

丸山竹秋

したまつ暗な晩でも、また目をつむつても、手さぐりで望む本を探すことは、かんとんに出来たほどであった。

ところがである。そのように本好きの私が、四十三、四歳のころから、パツタリと本が読めなくなつてしまつた。いつのまにか、本をひらいてもそのつぎを読みつづけるエネルギーをなくしている自分に気がつき、ハテ？ と首をかしげるようになったのである。

それは、本を読むということによって真理を思い、美を感じるということよりも、じつさいの人生生活や大自然の状態から直接にそれらを得ようとする気持ちが強くなつてきたためである。

多くの本を読みあさるのもよいが、今はそれよりも一冊の本をふかく理解することだ。理解することとは、ほんとうは実践することなのだ。実践とは、それを身をもって味わい、身をもって行なうことである。

道徳的な内容であれば、みずから実行するということだ。美的な内容であれば、その美しさのみずから酔い心を遊ばせることだ。宗教的な内容にたいしては、みずからを信の立場におくことである。これらをひろく実践といたい。

そうしたみずからの実践をとおして書を読むことが、自分には正しい読みかたであると思えるようになった。本そのものは、あくまでもインデックスにすぎないと思うのである。（「よるこんで生きる」より）